

## 外 国 語

### 1 科目構成

改 訂		現 行	
科 目 名	標準単位数	科 目 名	標準単位数
コミュニケーション英語基礎	2	オラル・コミュニケーションⅠ	2
コミュニケーション英語Ⅰ	3	オラル・コミュニケーションⅡ	4
コミュニケーション英語Ⅱ	4	英 語 Ⅰ	3
コミュニケーション英語Ⅲ	4	英 語 Ⅱ	4
英語表現Ⅰ	2	リーディング	4
英語表現Ⅱ	4	ライティング	4
英語会話	2		

- 「コミュニケーション英語Ⅰ」をすべての生徒に履修させる科目とした。
- 4技能の総合的な育成を図る4つの科目（「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「コミュニケーション英語Ⅲ」）、「話すこと」及び「書くこと」に関する技能を中心に論理的に表現する能力の育成を図る2つの科目（英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ）及び会話する能力の向上を図る「英語会話」の計7科目構成とした。
- 中学校における学習の確実な定着と「コミュニケーション英語Ⅰ」における学習への円滑な接続を図るため、選択履修科目として「コミュニケーション英語基礎」を新設した。

### 2 改訂の基本方針

改訂の基本方針は次のとおりである。

- 4技能を総合的に育成する指導を充実するよう改善を図ること。
- 教材の題材や内容については、4技能を総合的に育成するための活動に資するものとなるよう改善すること。
- 4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、文法の指導を言語活動と一体的に行うこと。
- コミュニケーションを内容的に充実したものとするため、指導すべき語数を充実すること。
- 「聞くこと」や「読むこと」と、「話すこと」や「書くこと」とを結び付け、四つの領域の言語活動の統合を図ること。
- 中学校で学習した事柄の定着を図り、高等学校における学習に円滑に移行させるために必要な改善を図ること。

### 3 改訂の内容

「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」をすべて履修させた場合、指導すべき語数は高等学校で現行の1,300語から

1,800語、中学校と高等学校の合計で現行の2,200語から3,000語となり、指導すべき語数の充実が図られた。

また、文法事項については言語活動と効果的に関連付けて指導することを明確化するとともに、高等学校で扱うべきすべての文法事項を「コミュニケーション英語Ⅰ」で適切に取り扱うこととされた。

さらに、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすることも明記された。

## (1) 目標

外国語科の目標は、次のとおり示されている。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

外国語科の目標は、外国語を通じて、コミュニケーション能力を養うことであり、次の三つの柱からなっている。

ア 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。

イ 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。

ウ 外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと。

アは、外国語の学習において、その言語の仕組み、使われている言葉の意味や働きなどを理解することや、その言語の背景にある文化に対する理解を深めることが重要であることを述べたものである。また、このような学習を通して、外国語や外国の文化のみならず、日本語や我が国の文化に対する理解が深められ、さらに、言語や文化に対する感性が高められ、ひいては、広い視野や国際感覚、国際協調の精神を備えた人材の育成につながることを期待される。

イは、外国語の学習や外国語の使用を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることに積極的に取り組む態度を育成することを意味している。このようなコミュニケーションへの積極的な態度は、国際化が進展する中であって、異なる文化をもつ人々を理解し、自分を表現することを通して、異なる文化をもつ人々と協調して生きていく態度に発展していくものである。

ウにおける能力とは、外国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図る能力のことであり、情報や考えなどを受け手として理解するとともに、送り手として伝える双方向のコミュニケーション能力を意味する。

今回の改訂を踏まえ、中学校における学習の基礎の上に、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成するための統合的な指導を行い、生徒のコミュニケーション能力を更に伸ばすことが大切である。

なお、今回の改訂に当たり、現行の「実践的コミュニケーション能力」から「コミュニケーション能力」となっているが、これはコミュニケーションが実践性を当然に伴うものであることを踏まえたものである。

## (2) 各科目

## ＜コミュニケーション英語基礎＞

### ア 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な能力を養う。

### イ 内容の構成と取扱い

この科目は、中学校における学習の確実な定着と「コミュニケーション英語Ⅰ」における学習への円滑な接続を目的として、選択履修科目として設定された。

指導内容については、生徒の実態に応じ、主に身近な場面における言語活動を経験させながら、中学校における基礎的な指導内容等を整理して指導し定着を図ることとした。

## ＜コミュニケーション英語Ⅰ＞

### ア 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。

### イ 内容の構成と取扱い

この科目は、高等学校外国語科において、英語を履修する場合に、すべての生徒に履修させる科目として設定された。中学校におけるコミュニケーション能力の基礎を養うための総合的な指導を踏まえ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成するための統合的な指導を行う科目である。

特に、聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりすることや、簡潔に書くことなどの統合的な言語活動が行われるようにした。

指導する語彙数は、現行の「英語Ⅰ」と同様、400語程度の新語とされている。また、文法事項については、言語活動と効果的に関連付けながら、すべての事項を本科目において適切に取り扱うものとされている。

## ＜コミュニケーション英語Ⅱ＞

### ア 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝える能力を伸ばす。

### イ 内容の構成と取扱い

原則として「コミュニケーション英語Ⅰ」を履修した後に、更に英語の履修を希望する生徒の能力・適性などに応じて選択履修させる科目として設定された。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、生徒のコミュニケーション能力を伸ばす指導を発展的に行う科目である。

特に、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をすることや、聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、話し合うなどして結論をまとめたり、まとまりのある文章を書いたりすることなどの統合的な言語活動が行われるようにした。指導する語彙数は、700語程度の新語とされている。

## ＜コミュニケーション英語Ⅲ＞

### ア 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を更に伸ばし、社会生活において活用できるようにする。

### イ 内容の構成と取扱い

原則として「コミュニケーション英語Ⅰ」及び「コミュニケーション英語Ⅱ」を履修した後に、更に英語の履修を希望する生徒の能力・適性などに応じて選択履修させる科目として設定された。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、生徒のコミュニケーション能力を更に伸ばし、社会生活において活用できるように指導を行う科目である。指導する語彙数は、700語程度の新語とされている。

## ＜英語表現Ⅰ＞

### ア 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う。

### イ 内容の構成と取扱い

中学校における、コミュニケーション能力の基礎を養うための総合的な指導を踏まえ、話したり書いたりする言語活動を中心に、情報や考えなどを伝える能力の向上を図るため、選択履修させる科目として設定された。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う科目である。

特に、与えられた話題について即興で話すことや、従来「オーラル・コミュニケーションⅠ」及び「オーラル・コミュニケーションⅡ」における指導内容とされていた発表を行うことなどの言語活動を行うこととされている。

## ＜英語表現Ⅱ＞

### ア 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばす。

### イ 内容の構成と取扱い

原則として「英語表現Ⅰ」を履修した後に、更に英語の履修を希望する生徒の能力・適性などに応じて選択履修させる科目として設定された。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、「話すこと」及び「書くこと」に関する技能を中心に、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばす指導を発展的に行う科目である。

特に、主題を決めて文章を書くことや、討論を行うことなどの言語活動を行うこととされている。

## ＜英語会話＞

## ア 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、身近な話題について会話する能力を養う。

## イ 内容の構成と取扱い

中学校におけるコミュニケーション能力の基礎を養うための総合的な指導を踏まえ、聞いたり話したりする能力の向上を図るため、選択履修させる科目として設定された。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、身近な話題について会話する能力を養う科目として、従来の「オーラル・コミュニケーションⅠ」及び「オーラル・コミュニケーションⅡ」を改編した科目である。

特に、海外での生活に必要な基本的な表現を使って会話することなどの言語活動を行うこととされている。

### (3) 英語に関する各科目に共通する内容等

#### ア 言語活動

英語に関する各科目において、言語活動を行う際の参考として「言語の使用場面」及び「言語の働き」の具体例がそれぞれ示された。

「言語の使用場面」については、中学校における指導内容との連携を考慮に入れ、特有の表現がよく使われる場面や、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面など三つの使用場面に整理され、それぞれ代表的な例が示された。また、「言語の働き」については、「コミュニケーションを円滑にする」、「気持ちを伝える」など五つの働きを設定し、それぞれに具体例が示された。

#### イ 言語材料

「言語活動を英語で行う」ためには、各科目の目標の達成にふさわしい活動が行われるように、適切な言語材料を用いる必要がある。言語材料は「語、連語及び慣用表現」、「文構造のうち、運用度の高いもの」及び「文法事項」の三つから構成されている。言語材料については、言語活動と効果的に関連付けながら、各科目の目標が達成できるよう指導することが重要であり、言語材料に関する知識を得ることのみを目指して、解説や問題演習に終始しないように注意する必要がある。

また、「コミュニケーション英語Ⅰ」が必修科目になったことに伴い、「文法項目」にあげるすべての事項を「コミュニケーション英語Ⅰ」で取り扱うこととした。

### (4) 指導計画の作成に当たっての配慮事項

外国語科の指導計画の作成に当たっては、学校の創意工夫を生かし、全体として調和のとれた具体的な指導計画を作成するものとされており、具体的には「コミュニケーション英語基礎」については、「コミュニケーション英語Ⅰ」に円滑に接続することができるようにするとともに、その他の科目については、それぞれの科目の特性に応じて、生徒に身に付けさせたい能力を明確にして、それぞれ年間、学期又は単元ごとの指導計画を作成する必要があるとされている。

各科目の履修の順序については、次のとおりである。

ア 「コミュニケーション英語Ⅱ」は「コミュニケーション英語Ⅰ」を、「コミュニケーション英語Ⅲ」は「コミュニケーション英語Ⅱ」を、「英語表現Ⅱ」は「英語表現

I」をそれぞれ履修した後に履修させることが原則である。また、「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「コミュニケーション英語Ⅲ」は、「英語表現Ⅰ」及び「英語表現Ⅱ」並びに「英語会話」と、「英語表現Ⅰ」及び「英語表現Ⅱ」は「英語会話」と並行履修させることが可能である。

#### 4 質疑応答

問1 「授業は英語で行うことを基本とする」ことを踏まえ、どのような指導を行っていく必要があるか。

「授業は英語で行うことを基本とする」こととは、教師が授業を英語で行うとともに、生徒も授業の中でできるだけ多く英語を使用することにより、英語による言語活動を行うことを授業の中心とすることである。これは、生徒が、授業の中で、英語に触れたり英語でコミュニケーションを行ったりする機会を充実するとともに、生徒が、英語を英語のまま理解したり表現したりすることに慣れるような指導の充実を図ることを目的としている。

英語に関する各科目の「特質」は、言語に関する技能そのものの習得を目的としていることである。しかし、このような技能の習得のために必要となる英語を使用する機会は、日本のEFL環境（英語が外国語であって生活の中で使われることがほとんどない環境）で生活する生徒の日常生活において非常に限られている。

これらのことを踏まえ、英語に関する各科目の授業においては、訳読や和文英訳、文法指導が中心とならないよう留意し、生徒が英語に触れるとともに、英語でコミュニケーションを行う機会を充実することが必要である。

その際、「生徒の理解の程度に応じた英語」で授業を行うためには、語句の選択、発話の速さなどについて、十分配慮することが必要である。特に、生徒の英語によるコミュニケーション能力に懸念がある場合には、教師は、生徒の理解の状況を把握するように努めながら、簡単な英語を用いてゆっくり話すこと等に十分配慮することが必要である。

問2 「コミュニケーション英語基礎」を履修させる場合、「コミュニケーション英語Ⅰ」と同時に履修させることができるか。

「コミュニケーション英語基礎」を履修させる場合、「コミュニケーション英語Ⅰ」は原則として「コミュニケーション英語基礎」を履修した後で履修させることとされている。そのため、第1学年で「コミュニケーション英語基礎」と「コミュニケーション英語Ⅰ」を履修させる場合、例えば、前期に「コミュニケーション英語基礎」を履修させた後、後期から「コミュニケーション英語Ⅰ」を履修させるといった教育課程上の工夫を、学校や生徒の実態に応じて行うことが大切である。